

の侍醫甲乙を招きて診治の術とつくさせ其上諸寺諸山の名僧檀者に加特と請ひ加之當時若
 名の神道者にて麻布に住居せる金子駿河といへる者とも招きて祈禱させしかど命救の盡く
 る處神佛の加護醫藥の効力も如何ともとること能はざし枯葉に風渡る十一月の月洗に
 最早今日明日の命も頼みタたさまで衰へ果給ひぬ殿にも今此うと思ひたまひけん廿三日
 の夜奥方より戸家老野村多仲の胸名を傍近く招寄せ重き枕を擡げ苦き息を突きつゝ終に行
 く道との厭で覺悟とれば今更吾死に歎
 かねども只心に懸るゝ岡部の家名悻第
 次郎幼年なれば汝等兩人能く心を用ひ
 て之を補佐す我兄同姓筑前守と何彼を
 評議し幕府の沙汰家臣の統御領民の撫
 育等過失なきやう執行ふべしと懇に
 遺言せられしが其翌廿四日の朝二十二



歳を一期として軒端の霜どもろどもに
 果敢なく消去りたまひけり奥方の悲嘆
 家臣の落胆更に喩ふるにもものもなく
 さながら旨者の杖に離れし思ひにて只
 管蠶惑の眉をぞ頼めける爰に又美濃守
 ぬの兄君長憲ぬのに故りて幼少
 の時より分家飯田なる旗本岡部筑前
 守方の養子となり即當代の筑前守は
 なり知行三千石を領し中興御小姓と
 り年頃十五六にて容色いゝ艶美なる町の娘を駕籠の中より垣間見て不圖
 想を懸けかゝる乙女に枕の塵を拂ひせてこゝろ男と生れし甲斐あれなぞそゝろに心を懐き
 ま給ひしが家臣のおもわく流石明白にも言出しかねそのまゝにして打過ぎけり

